

練馬区小中一貫教育資料作成委員会（第3回）「キャリア教育の推進」部会 要点録

開催日時	平成21年7月22日(木) 午後3時00分～午後5時45分	
会場	練馬区立大泉小学校2階 応接室	
出席者	委員	廣嶋憲一郎、小野雅保、石井友行、岡本昌子、安井実、根本裕美、飯塚剛、野田恵威子、望月徳生、高橋吉久（敬称略）
	その他	教育出版
	事務局	芝田智昭 指導主事

1 はじめに

部長

キャリア教育、かなり深みと広さがある感じがしている。練馬区のキャリア教育とは、練馬区ならではの課題を考えたときに、小中一貫校で取り上げてもらえる魅力的な内容になってくると感じている。ある一般的なキャリア教育の中で、練馬区の子どもたちに光を当てたときに何が浮かんでくるのかが、大事になってくる感じがしている。

事務局

事務局から前回の要点録の修正について。本日の協議の内容について。一つが実践報告、二つ目が持ち寄っていただいた資料を協議し、部会でのコンセンサスを得られればと考えている。

2 協議

委員

小学校側から、中学校側というかたちで前回の資料を具体的に10分程度で説明していただきたい。

委員

一つ目が「この町大すき石神井大はっけん！Ⅱ お手つだいたんけんに行こうよ」という実践に関するもの。生活科は最終的には自立への基礎を養うところにあり、自分の成長と非常に関連がある。生活科をやりながら、どんな成長を遂げたのか気づかせたいと思ってやってきたものと、学校を卒業してもこの町に生きていく喜びや楽しさを味わってほしいと思って考えた単元。キャリア教育と生活科の関連は、この単元と関連しているのではないかと思い、ラインを引いた。

事例について、ねらいは自分たちの住む町にあるものや公共施設の様子を調べたり、そこで働く人との関わりをとおして町のよさに気づき、愛着を持って自分の生活を広げることができる。改訂学習指導要領では「まちで働く人」着目している部分があるので、「働く人」に触れさせたいと思った。前半はごく普通の生活科のとおり、町の中の公共施設や石神井公園の探検に行き、「町のすてきはっけん」ということを行って来た。それをステップアップした。子どもたちが20の場所に分かれて実際に手伝いに行く。子どもには「町のことがもっとわかるために」「町の人と仲良くなる」ということを投げ掛けグループに分ける。探検先には、公共施設、

商店街、JA、幼稚園・保育園、お寺、石神井公園の管理事務所などがある。正味2〜3時間、お手伝いさせていただき、戻ってまとめ、友達に伝え合う。伝え終わった後、活動を振り返って自分の振り返りをする。子どもたちと地域とつなぐ、見えない職業を見るという点では、よかったのではないか。この単元が終わると、子どもたちは町の人たちに自然に挨拶ができるようになる。ここで大事なのが最後で必ず、必ず自分の成長に返すようにしていくところ。現在、私にとっての課題だし、ポイントだと考えている。低学年で身につけさせたい、挨拶をすること、自分の言葉で伝えること、職業への夢を持つこと、感謝すること等、いろいろな要素が詰まっているのではないかと思う。

もう1点「私の未来設計図をつくろう」ということ。これは卒業を前にした6年生に自分自身のよさ、可能性にもう一度気づかせ、将来の夢を持たせたいということで、担任が計画して行った授業。10〜15年後何をやっているかという、職業が考えられる。実際に子どもたちは職業を知らないので『13歳のハローワーク』に出ている地図を取り寄せ、やってみたい職業を調べた。また、家族や地域の人にゲスト・ティーチャーにきていただいた。その後「やってみたいと思う仕事」にもう一度立ち戻って「未来設計図」を書かせた。例えば今の自分、5年後、10年後、その職業に就いたときと未来を想像し、そこまでに自分が何をやるのかを記入させていった。最後は、想像したことを、10、15年後の自分にあてて手紙を書き、保護者にも読んでいただいて終わりにした。

委員

東京都のHPを見たら、自己肯定感を高める研究実践のまとめをこれからやっていくと出ていた。自己肯定感はキャリア教育の中でも大事なところだ。本当にすばらしい実践だと感じた。生活科のところ、1年生のどんな活動から2年生の活動につながるのか。

委員

内容は「地域と生活」に基づいている。

委員

1年生は学校探検で、働いている先生、給食室等そういうところもつなぐと考えるとよいのか。

委員

働いている人となると、そちらからつながっていくと思う。

委員

本校では総合的な学習を使い、義務教育を終えて社会に出たときの生き方を考える機会をつくるということで、1年生で身近な保護者、近所の方の職業やその人の生き方を調べてくるといのが最初だ。改まったかたちでインタビューをし、まとめて仲間に発表する。次、1年生は職場を訪問してインタビューする。実は光四中生の家庭環境には片親やパートタイムみたいな方もいて「身近な人の生き方」からどうつなげていこうかが私たちの課題だ。身近な大人は非常に苦労しながら生きているが、それが社会のすべての姿ではない。子どもたちもお金を稼ぐ

ためだったらアルバイトもしようがないという感覚がある。職場訪問は、交通費、安全の面もあり、近隣の職場、事業所を訪問するので、職種に限りがある。ただ子どもたちにとっては、いろいろな職種に携わる大人たちに初めて触れることで、意味のあることだと思う。2年生になると職場体験を2日間行っている。これも子どもたちが好きなところだと、コンビニやファーストフードなどしか思いつかないので、職種が限られる。それでこちらから訪問する職場を広げるようにしている。

3年生になって義務教育を終える最終学年として、どのように生きていくのか、いよいよ自分の進路になる。進路と受験、進学というのがごっちゃになりがち。総合的な学習では「進路」や生き方が必ずしも高校へ行くこと、学校を受けることだけではないことから話を始め、夏休みを使い、卒業後の上級学校を調べてくる。それを仲間に発表して、情報のやりとりをする。そして秋に本当に自分の進むべき進路という感じ。この5年ぐらいやって、私たちの工夫が必要だと思うのは、職場訪問、職場体験と、進路、上級学校調べのところに線が引かれ、保護者に一貫した流れと思ってもらえない。これがキャリア教育をしていくときの課題になると思う。子どもの進路を決めるときに、進学が中心になるのかもしれないが、保護者には三年間がつながっているというのを理解してもらえない感じ。

子ども一人ひとりの持っている能力に気づかせ、それを生かすためにどうやって生きていくかを3年間で学んでほしいのと同時に、すべての大人が100%天職だと思ってやっているわけではなく、紆余曲折があって今のポジションで働いている。その中でも自分の特性を生かし、社会に貢献しようとしていることを学ばせるのがポイントだと私は思う。

委員

うちでも通常級の生徒は職場体験をやっている。やらせるのは簡単だが、それに付随する指導の時間が少なく、指導しきれていない。今後、それを解消しなければいけないという思いはあり、野田先生の言われた課題点はそのとおりだと思う。

部長

職場体験・職業体験の中で、クリエイティブなことをやるというよりも、仕事そのものの価値や努力、苦勞、仕事をしている大人の姿の尊さを子どもたちが実感的にわかることが非常に大きい。働くことを通してその価値観に気づく。そこを掘り出してキャリア教育の軸の1本ができるといい。

委員

中学校では、働くことの意義・意味、職場体験、進路選択と、学年進行の印象が非常に強いのだが。

アドバイザー

中学校の3年間を見通して段階的に考えるという発想は大事だと思う。ただ、カリキュラムと関連させて進むと、中身まで細かく紹介するスペースはないから、実際はそれぞれの学校が創意工夫して取り上げてもらうことになるだろう。特活あるいは総合で位置づけるのか。カリキュラムとしてどちらで出した方がいいのか。小学校の流れからいうと、職業的なものをずっと

と、生活・総合で位置づけても、成り立つかと思った。野田先生の生徒の勤務評価表について。ネーミングは考えたほうがいい気がするが、項目は、非常にいいと思う。この効果はどうか。

委員

職場の方も評価するために真剣に見てくれるし、生徒にとっては、働くことの厳しき、自分たちのできている部分を確認するという点で、とてもありがたいものだ。実習が始まる日に渡してほしい、職場体験を終えてという感想文を持って行って、評価表をもらってくる。

アドバイザー

この評価の観点はいいのだが、評価がいいから職場体験の目標は達成したことにはならない。

委員

「評価評定」という言葉がいけないと思う。子供たちは働く大人から、実際の社会、実生活ではきちんとしなければいけない部分もあるとか、自分のこういうところは実際の社会でも認められるのだとかという意味合いで受け止めている。

アドバイザー

何を目的としてキャリア教育を固めていくかと関係するが、最終的に職場体験の目的がどう達成されたか。例えば、勤労観が中学生なりに育ったのかが本当は一番大事な気がする。

委員

中学生は、働くことは厳しいという感想が多い。視野が広がるのだろう。

委員

職場体験、何を目的としているかということで、責任感を痛感して帰ってくる生徒が多い。視野は広がってちょっと大人びた感じになってくる。

部長

心の内面をどう体験で耕せたか。それがキャリア教育の根底にあるのだと思う。だから小学校低中学年でも、職場体験の仕事のつらさ、苦勞というのが垣間見えて、それを大人たちは成し遂げ、克服する作業をやっているというのは大体わかっていると思う。苦勞しながら成し遂げたときの仕事の喜びというところまでいけば、キャリア教育の根っここのねらいまで到達する。小・中9年間の中で、心の内面の価値づけがスパイラルに出てくると、わかりやすくなる。ここに、お店を開いて楽しむとか、仲間同士で触れ合う、苦勞して成し遂げて仕事の喜びを味わうなどの質的な深さが出てくると、キャリア教育の部会として何か出せるという気がした。

アドバイザー

陥るといけないのは、刻苦勩励して苦しんで人のために貢献して自分を縛りつけながら、「でもがんばった私」というのも、ちょっといかがかと。仕事をつらいなと思いつつ喜び合っているのと同時に、一方では娯楽産業もある。ある意味では音楽、スポーツなど、人々を安らが

せ、喜びを与えているような場もある。そういう豊かなイメージの中でキャリア教育をやると、練馬ならではのものが出てこないか。もっと心のゆとりのあるようなところが出せたら。

委員

少し話が戻って、特活か総合かがちょっと微妙なところ。それをこの部会として整理するのか、ちょっと判断に迷う。それぞれに特活は特活、総合は総合できちんとしたねらいがあって、1本筋で9年間を見通してやるとすれば、どうしたものか。

アドバイザー

それは必ず整理しておかないとだめだ。

委員

特活か、総合か。生活総合。小学校の先生方は、生活総合という感じなのか。

委員

生活科って、もともと社会科と理科。総合と内容が似ているかというところと全然違うし、でもひとくくりにするケースが多い。

アドバイザー

生活と総合を「生活総合」とひっくるめて研究団体が立ち上がったが、本来これは間違っている。生活科はやはり理科、社会とつながるのが普通の姿だ。つながるとしたら総合はすべての教科、領域と横断的に関連する。でももう、研究団体の流れはそちらで固まってしまっている。

委員

小学校は担任が低学年になったり、高学年になったりするの、まず研究団体として生活科だけでは難しい。やはり総合のほうに近いと思う。

事務局

石井先生の表を整理するとしたら、「生活科・総合的な学習の時間」を「生活科」だけにして、「総合的な学習の時間」を小学3年に持っていけばいい。

それから、職場体験シリーズが、特活と総合の間に入る石井先生の位置取りはいいと思った。中学校によっては職場体験を総合で扱う。だから生徒、学校、地域の実態として総合で扱う学校もあるし、一方、特別活動の中で扱う学校もある。

委員

まず支援学級の教育課程から抜粋して持ってきた。就労にむけて、社会適応能力を身につけさせるために教科カリキュラムを組んで、総合や道徳をやっていることを読み取っていただきたい。道徳の計画も「コミュニケーションをとっていきけるためには」というところが中心の内容になっている。あと、本校通常級の職場体験についての資料、抜粋。1年生のときには職場

訪問し、その職業の人たちの苦勞、仕事の姿勢といったものを聞き取る学習をさせている。3年生は、やはり進路学習に重点が置かれているので、職業についての学習はほとんどやっていない。

私としては通常の学級、または小中の交流から、社会にはいろいろな人がいるのだと理解してもらおう。そういうところが、このキャリアで進めてもらえるといい。障害や障害を持っている子どもを理解してもらうことによって「こうすれば一緒に付き合っていける」「社会の中で本当に不必要な人がいない」という理解を進められる教育ができるといいと思う。

中学校の支援学級にきている生徒は、やはり自分の障害や苦手な部分を理解しながら、ではこういう仕事はできるという職業観につなげている。マナー、ルールといったことをきちんと教え込むことで、「障害者は」と言われないように。それから支援を求めるのではなく、一生懸命生きて活動していることを表現できる人になってほしいと指導している。通常学級、小中学校以外の部分での連携としては、中学または高等部を卒業すると、余暇活動ができない。そういう余暇活動を支援してくれるサークルとの連携を話し合いながら進めている状況。

支援学級にきている子は、学年ではめると3、4年生、生活レベルで言うと7歳程度の子たちなので、小学校のカリキュラムを参考にしている。ただ小学校と違うのは、社会に出なければならない時期が押し迫ってしまっているのも、保護者も我々も計画的に支援をし、本人たちにライフスタイルをつくらせていかなければいけない。これが支援学級ではキャリア教育になると思っている。職場体験、本校では通常学級と並行して進めているので、中1で訪問、中2で職場体験をやっている。私の出したものは、障害の分野は知的である。

ほかに本校では交流給食ということで、年度の初めに一人ひとり交流クラスを決めておき、そこに行って給食を食べる、今度は逆に支援学級にきてもらって一緒に食べる。それから、デイサービスセンターが隣接しているので、ふれあいを持つということで七夕会をやったり、お年寄りから遊びを学んだり、百人一首のカルタ取りをやったりしている。運動会は交流クラスに入って、一員として活動している。遠足、校外学習なども、クラスに入っている子どもは班活動をさせている。支援学級の中でもリーダーを育成し、教師主体ではなくそのリーダーによって運営できるようにしている。

委員

キーワードとして自立、勤労観、職業観を頭に思い浮かべながら拾っている。だから、そういうキーワードでふるいにかかっていると、完璧ではない。

委員

支援学級の設置校であれば、その学校の中で通常級との交流は盛んに行える。今回、小中一貫になったときに、例えば練馬中の支援学級に小学校が訪問してきてくれて、一緒にできるようなカリキュラムが組めると、すごく温度差が縮まる。支援学級設置校の子どもたちと、そうでない通常の子たちの障害者の見方、ふれあい方の差がすごくある。なるべく、一緒に何かする機会ができないか、この中に埋め込めればいいのかと思った。

部長

進路指導とキャリア教育、内容的にはそんなに変わらないだろうが、出口教育にいろいろな状

況が生まれた中でキャリア教育が出てきたのだろう。「キャリア教育とは」を読んでいるが、言葉が難しい。キャリア発達とか、定義づけされている説明文自体が難しい。練馬はこう解釈して、キャリア教育のねらいをここまでやりましたとせまらないと難しいと思う。先ほどのキーワードが「自立」「勤労観」「交流」とある。それをもっと平易に変えていくと、ある種練馬らしさが出てくる気がしている。

本当の根っこのところである程度、キャリア教育の共通確認が必要かと思った。そうすれば、小と中であろうが、文案もできるだろうし、事例もまとめることができる。キャリア教育でねらいが多岐にわたっているが、全部はできない。せいぜい三つか四つで、それを絞り込む作業も必要。

委員

もう一つの視点として「小中一貫教育校の」ということがある。私がつくった表は、これまで行われていた小中という区切りの中でキャリア教育に関するものを当てはめたが、とくにⅠ、Ⅱ、Ⅲ期と、今回分けているわけだから、改めて吟味しなければいけないと思っている。

部長

桜小中を想定して作っているのか。そうすると特別支援学級が必要かどうか。それでできたときに、校長が自分の教育課程として、それをチョイスするには大体1年前ぐらいに必要な。だから「練馬ならでは」というのをもっと矮小化すると、桜周辺の地域で職場体験をやるとしたら、どういう特色のあるものがあるか、一つ二つは挙げておかないと一般的なものになってしまう。

事務局

学校は固定化しないのが建て前だ。建て前だがある程度の学校をイメージしないと、一般的なものにしかかなり得ない。ただ、桜小中を念頭に置くことで、この資料の範囲が狭められたり、先生方の持ち寄ったものが生かされないのであれば、そんなに意識はする必要はないと思う。特別支援学級はぜひ入れたい。設置校は練馬にたくさんあり、そういう学校への資料提供の意味もある。

部長

フローチャートが出ると真っ先に開設する学校の先生方を見て、それを使いながらある程度ラフな教育課程のためのたたきき台になるだろう。あまり固定化するわけにもいかないが、少しはその香りがないと厳しい。なぜかと言うと、今でも職場体験、生活科・総合で充実してやっているところを組み合わせたら、それは一つのモデルとして遜色ないものができる。それは小中一貫であろうがなかろうが、充実した題材をやればできるという結論になるとまずい。小中のⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期ならではのキャリア教育のよさを出さなければ。Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期のかたちでやるから、もっと効果的にできるのだということが入っていないと、小中一貫の作成資料としては弱いと言われてしまう可能性がある。同時に実践事例は当該校が少し見え隠れするぐらいのものが必要かと思う。

アドバイザー

練馬区は、小中一貫教育を最終的に全学校に広めるために立ち上げている。一貫校が一つの象徴だが、1校だけなら、こんなに人が集まってやることはない。最近はどういろいろな地域で「小中一貫」と言って、従来「連携」と言っていた中身をやっている。その一貫教育を、施設が一体化していなくてもいいところを取り入れて進めてもらいたい。小中の段差を埋めたいのだと思う。そうするとむしろ一貫校より、自分たちのカリキュラムを作るということ。施設一体型の一貫校は、校長の責任においてカリキュラムを作るわけで、そのとき参考になる分にはかまわないが、我々が作る必要はない。このことを練馬区全体の小中学校に広めることによって、もう少し課題が解決されるのではないかな。

一貫校の場合、9年間を見通して積み上げなければいけないから、教科そのものの指導法の問題も実に切実だ。小中の先生のずれを埋めていくことから始まり、大きな問題を抱えているので、キャリア教育までは最初は目がいかないかもしれない。さっき、どこかで使えると思ったのは、例えば中学校の特別支援学級と小学区の普通学級が相互交流することまで視野に置いたら、教育はちょっと進むのではないかな、よくなるのではという感じがある。それはもっと一般の学校に期待したいことだ。

もう一つ、今でも近隣の学校で連携して授業をやっている事例が出てきている。それを例えば中学校区ごとに、連携してくださいという話は進んでいるのか。

事務局

小中連携はお願いしたいとずっと継続して言ってきているが、必ずこの学校で、このかたちで、ここまでというのは言っていない。

アドバイザー

三重構造になっている。施設一体型の学校、指定した連携校、全く指定もされていない、今まで何も実践していないところ。私は、その何もないところに広げていきたいという発想なのかと。そのときに核になる学校を当該校にして、やれる施策を全区に広げたいということなのかと理解したのだが。

部長

この設置目的をそのまま読むと、「小中一貫教育校を設置するにあたり」とある。いわゆる一貫校の教育課程の土台になる、9年間にわたる一貫した小中一貫教育資料を作成するというのが公式になってしまっている。やはり小中一貫校の延長線上の中での資料作成委員会の部会なのかなど。

まず当面は小中一貫設置校の設置は桜小中学校だ。次はまだ見えていないから、桜というのは見え隠れしながら考えざるを得ないだろう。中長期計画で出ていけば全然違うし、抽象的にやればできないことはないが、後で修正と言われるのも困るだろう。

事務局

私のイメージは、1年次は石井先生の表に集約する方向がいいと思う。これ以降、拡充する方向性としては、この部会のキーワードが自立、勤労観の育成、自己肯定感であり、それがこ

の今、「特別活動」「生活総合」「道徳」が並んでいるこの桁にきて、それぞれの活動が囲みで入っていく。この活動は教育課程上、総合であるとか、Ⅱ期の、5、6、中1のときには、こういう活動が考えられ、教育課程上はこのように位置づけられるというものが最終的にできると、おもしろい。

委員

なんとなく方向性が見えてきただろうか。自分の資料について、小中一貫校に限らないで考えてもいいのだから、もっと違った表現になるだろうし、もっとコンパクトでもよいのではと思うが。

部長

大枠は本当にいいと思う。問題は(3)の「本部会では」というところからキャリア教育をどう位置づけるかというところが、いちばん苦勞する。このキャリア教育の概念は、文部科学省のHPに出ていたのがこれだ。これは今までの調査研究に出たものよりもう一段わかりやすくなっている。だからこういうものを参考にしつつ、本部会でキャリア教育をこういうことと捉えることになれば、持っていきやすい。

事務局

私は「部会で重視する指導項目」というのを作ってみた。この部会の進め方が、具体から抽象にしようとしている流れだ。だからまずは具体的な活動でどんなことがわかるのかをみんなでもまとめている段階。とくに指導の重点としては三つ挙げたいと考えた。一つ目が体験活動を積極的に取り入れる、二つ目は子どもが具体的な成長モデルを想像できる、三つ目が自己有用感を実感できる。このキャリア教育を推進するにあたっては、子どもたちにとっては素地にもなり、また心情的にも確実に身につけてほしいという受け止め方をしている。この三つが、どこかの軸になったほうがいい。

委員

小中一貫ということを考えると、1年から9年生までの感覚が必要だと思う。小中の教員のかかわりも必要なのでは。今のままでも充実したキャリア教育ができるけれども、小中一貫という部分が抜けてしまう。8、9年生は、これからは1〜6年までとも何か関わりながら、キャリア教育をやらなければいけないのではないか。そうすれば、それが桜であろうとなかろうと可能だ。ただ問題は、敷地がそばであれば考えやすいが、そうではなく一貫教育となると、どういふものを目ざすのか、どのようにかかわっていくのかも必要になってくる気がする。

委員

練馬でも小中連携した学校同士でのカリキュラムの精選と、1年生から9年生まで、どういふものやっっていくか考えなくてはいけない。そのたたき台として、区部全体に対して、こういうふうなかたちで進めましょうというものがあってもいい。それから、やはり小中一貫なので子どもの行き来がないとやっている意味がない。カリキュラムだけ与えるのではなく、人の交わりがあって、はじめて一貫教育なのでは。もし、この第Ⅰ期的な部分でまとめるのであれば

ば、もう少し具体的な内容の資料を揃えていかなければいけないのではないかと。

アドバイザー

今のはすごく大事なこと。小中一貫のポイントが三つあると言われている。一つは子供同士の交流、二つ目は教員相互の交流、三つ目がカリキュラムとか指導法。今やっているのは三つ目のこと。だから「これだけやったらうまくいく」のではない。この部会で子供同士の関わりが初めて出てきたことがおもしろい。三つの軸は幼少連携でも、小中一貫でも必ずこの三つ。カリキュラムの中でかかわらなければできない中身と、かかわらなくてもできるものがある。かかわる中身は、作るときにゴシックで囲むやり方もあるのでは。道徳などでも6年生と7年生が一緒にかかわって授業を受ける場面があってもいい。よその例でおもしろいと思ったのは、中学校の校長先生が小学校に行き、朝礼をやる。逆に小学校の校長先生が中学校にきて朝礼をやる。視点が普段の校長先生の話と違って、感動があるらしい。道徳や特活の中身がこうではなく、来年度継続するなら、それに付いてくる具体的な事例集みたいなものができるといい。

私は、全体的に広げていくと思っている。もちろん、桜も私たちが作ったものを尊重してカリキュラムに位置づけてくれればありがたい。見通しとしては、小中一貫はかなり広がる。ただ解消しなければならない問題がある。地域や保護者の目が、今までは学校にお任せだったが、今は地域や保護者がものすごく注目する。最近見ている、学校公開などよりはるかに効果がある気がする。

部長

リトルティーチャーの学校公開をやるとおもしろい。ただ、「連携」と「小中一貫」は違う。小中一貫の効果とは「体験」、「モデル」、あるいは「有用感」がある。Ⅰ期は「学びの基本姿勢を身につける」と定義づけしている。「基本姿勢を身につける」のであれば、モデルとしては強く、有用感や役立ち感はまだない。Ⅱ期になったときは、意欲的に学ぶ姿勢まで行く。そのときには、むしろモデルが薄まりつつ、有用感、役立ち感が徐々に高まる。最後のⅢ期は、「主体的に学ぶ姿勢をつくる」とあるから、有用感がマックスになる。そういう概念があって、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期という大きなくくりの中に、発達課題は違うのだということが埋め込めれば、9年間としてくくった方が、発達課題を達成するにはいい方法なのか、なぜ小中連携よりも一貫のほうがいいのか書かないとまずい。

アドバイザー

なんとなくずれがわかってきた。教育委員会は「一貫」と言いながら、「連携」も「一貫」に含めて考えている。中学校1校と小学校3校が経営的に結びついて「連携」なのを、最近あえて「一貫」と教育委員会は言っている、経営一体型の一貫教育とか。「一貫」と言うと9年間一つの校舎の中でやるというイメージになる。今「一貫」の施設を作るためにこの事業を立ち上げたけれども、本当は「連携」でいいから、できるものはつなげて広げていきたいという思いだと思う。

委員

両方取りたいとなると、やはり一貫のよさは少し曖昧になってしまう。

アドバイザー

このカリキュラムは、意識としては施設一体型と、学校が隣接していてできそうなところをイメージしたプラン。それ以外のときどき連携するレベルのところは、取り入れられるところは取り入れてくださいという位置づけになるのか。

委員

小学校というのは圧倒的に6年生をピラミッドの頂点としてやっている。5・6年生が中学生に学ぶようなことを取り入れていかないと、ちょっと難しいと思う。

アドバイザー

そこがポイント。リトルティーチャーや中学校の先生が出前授業に小学校に入るとか、そのへんが、充実してくると、一貫という中身になる。

部長

勤労観が体験であって、成長モデルが自立につながり、自己有用感が自己肯定感につながるようなキーワード。それから小中一貫とはいえ、子どもの交流、教員相互の交流。カリキュラムを作成することを主眼として、文章のどこかにきちんと書かなければだめだ。

アドバイザー

特に特活で具体的に何か出そうな気がしているが。この特活の枠だと、小学校の特別活動の活動と中学校とがそのまま書いてある。本当はⅡ期のところで小学校と中学校のイメージがクロスしている。例えば小学校6年生が中学校を訪問したり、その逆もある。そこに人の交流が入ってくる。

委員

話を伺っていて、いちばん上に特活、生活科、総合、道徳、あとは特別支援学級はまた異質な分類なのだが、これでいいのかと。先ほど自立、勤労観、職業観、自己肯定感という柱でやったらというようなアドバイスがあったが、もう一つ、能力で分ける。人間関係形成能力、将来設計能力、情報活用能力、意思決定能力。それをここに当てはめて、内容についてはわかっているという前提で、具体的な活動を入れた方が活用しやすい。

アドバイザー

四つの能力はすごく難しい。ベン図で言うと、重なりが出る。

他の自治体がこれでカリキュラムを作ったが、結局学校にわかってもらえないというのでやめた。おそらく、言葉自体の解釈をめぐって、キャリア教育そのものの定義が難しい。そこにまた四つの能力を入れていくと、現場の先生方に読んでもらえない。どこに入るのかという議論ばかりしていた。

委員

石井先生が作ってくれた、大枠としてあとはどのように並べて表現するか。

委員

例えば特活、生活、総合、道徳という縦軸でいいのかどうか。例えばそれを自立、勤労、職業観、自己有用感というような縦にしてやってみるか。

事務局

さっきも言ったように、私は2年目でもいいと思う。横軸の領域の名前が書いてあるところに本部会で重視する指導項目を入れる。例えば、「自立」「勤労観」「職業観」と。それで持ち寄った指導事例、具体的な事例をこういうかたちで。

委員

例えば道徳についても、もっと具体的な教材とか指導を入れるのも参考にはなるかもしれない。

事務局

記号を実践事例に振っておいて。あとは実践事例を載せるから、AについてはAの実践事例としておけば、見る人はリンクできる。いちばん右側の「全学習期を通じて学習する内容」というところ、「全学習期」という表現については、他の部会との整合性を取る。

アドバイザー

先ほどの練馬らしさ、職業体験の話が出てきたが、製造とか第一次産業は練馬ではないのか。

委員

小学校の地域の職業で、実は牧場がある。

委員

大泉中は就農体験で、農家に行っている。

アドバイザー

結局、子どもたちの職業のイメージというのは、ほとんどサービス業で店員さんのまねごと。もっといろいろな職業があつて、体験できるような事例を出さないと。ここに表現できるかどうかはわからないが、そのへんが練馬らしさかと。

部長

大泉学園とか石神井周辺だと、わりと自営業関係がある。その中で畑と田んぼ、あと牧場があり、その地域の中で育っている子どもは「練馬大根」「農地」と言っても、あまり嫌がらない。そういう天真らんまんさがある子どもたちがいる。

アドバイザー

「練馬大根」という言葉に、すごく魅力を感じる。地域で子どもが育つという発想がどこかに必要。

部長

練馬の子ども観にちなんだキャリア教育というのはやはり出てくるだろう。発達段階によって目ざす児童像みたいなもの、その中の背景というのは、やはり共通理解しておいたほうがいい。そうすると練馬だったら、これができるという輪郭がはっきりしてくる気がする。

委員

前回職業体験の話で、東京の土地柄としてサービス業が多いという話をさせてもらった。支援学級の子たちが就労しているところは、福祉、製造、サービス業の3点。でも今社会情勢を考えると第一次産業の後継者が不足している。そういう仕事に適した子が支援学級の中にも多い。

本校は大きな畑があって、「おやじの会」というのがある。地元の農家の方がそこを管理してくださっている。支援学級では職業課程という教科の中で、その畑で農耕をやらせている。農業体験をさせることで適している子がいたら、三つのもの以外に進んでもらいたいというものもある。それから、働いて農作物ができて、収穫したものを食べたり、家庭に持って行かせることで、自分が働いて得て、それを消費してまた働く意欲にする。そういうサイクルの体験をさせている。

本当にそういう就職口があれば子どもたちを進めていきたいと思うが、なかなか。先ほどの3点のところに偏っている。ゆくゆくは何か機会があればいい。通常の子たちも土を触ったり、汚れ仕事みたいなことも経験しながら育ってくれるといいと思う。

委員

今の話の中で、農家あるいは牧場体験する中で、大人になったときに残っているのかとか、農家はなくても園芸とか。そういうものは残るのではないかということを考えさせる視点が、キャリア教育の中に必要なかどうか検討してもらいたい。

委員

私もそう思う。やはり第一次産業、農業で、自給自足ができなかつたら先行き厳しいという思いがある。そういうところに目をむけるのも必要なかと思っている。

事務局

今回は8月31日曜日、3時半から。その際は、私の、安井先生、石井先生の資料を修正してまたご提案いただきたい。実践事例については、他の部会との調整を図って7月中に連絡する。

前回の資料(4)の③、カリキュラムの教育課程上の位置づけが2ページというところ、他と調整して実践事例に替えようと思っている。実践事例は多くて1ページ。6事例を入れる勘定

をしているので、小学校を岡本先生、根本先生。中学校を野田先生、高橋先生。特別支援学級小学校を飯塚先生。特別支援学級中学校を望月先生。全部で10ページの予定。

委員 このⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期のところで、Ⅱ期について。施設一貫だったら、1～9年生という状況で進めることが可能かと思うが、本校のことを考えると、本校1に対して近隣の小学校が三つあり、距離的に離れていても一貫教育を進めていかなければならない。そのときに、小学校の頂点である6年生と7～9年生との交わりをどのように持っていったらいいのか、考え方を聞かせていただきたい。

委員 私もそのことで悩んでいたが、今この部会でやるべき内容ではないと思う。この部会としては4、3、2でキャリア教育をやるという話が前提なのか、ただ実践事例がないので、提示できるものなどは全くない。そこのところをもう少し共通理解する必要があるのかと思う。

部長 この資料が出てから、この文面がもっと具体で肉づけして、それでⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期はこういう効果なのだというのが4部会に共通してあれば、それをキャリア教育にはめ込んでいけばいい。

委員 実践事例も「小中の」と言っていたから、書くのは難しいのではないかと。Ⅰ期とⅡ期、Ⅱ期とⅢ期はまたがっているような事例があつて。

事務局 4・3・2で分けた方がいいのはこういう理由で、これは四つの部会に共通することである。と言い切ったものが必要。

委員 野田先生がこういうことを伝えたいというのは6年生でやったものと同じだった。そのへんでひとくくりのものができるとかと思った。

アドバイザー 小中の2人でつくるという手はある。一つの流れができるかもしれない。

部長 それをたたいたほうが生産的だ。今までになかったことをたたくのだから、これはいい。

委員 それが意外に自立とか、体験といったキーワードでつながっていけばいけるかもしれない。

アドバイザー

課題が多く出た。今日の議論は今まででいちばん、すつといかないところがよかった。また次回、みんなで知恵を出してがんばったらと思う。